

西の楼閣入口まで辿り着いた三人だが、ここにも鍵が掛かっていた。城壁を登る際に使った鍵がひよっとしたら合うのかもしれなかったが、折れてしまった以上最早それを当てる見込みもない。彼らはまずそれを探さねばならなかった。

この夜の空の下は暗かったが、三人が一旦戻って鍵の探索の為に由海と合流しようと決めたところで俄かに空が光った。遠雷が轟くのが聞こえ、その為に辺りが一瞬照らされる。この不気味な夜にあつてそれは不吉な雰囲気を感じさせたのだが、ふと西を見下ろした小春が二人を揺すった。

「あれ！ 今、一瞬十慧先輩が見えました！」

「何だって？」

果たしてそれが真実なものか、再び雷光が閃いた時には彼女の指さした西門の外側にはその姿は見られなかった。しかし万が一本当にいたならこのまま捨て置けるものではあるまい。三人は一旦城壁を降りて西門を目指した。

「あんだ、たち……」

果たせるかな、そこには確かに初佳が歩いて来ていた。その表情は明らかに冴えがなく、足取りも重そうにして色濃い疲弊を醸していた。

「ここで再会出来るとは思っていませんでした、無事だったんですね」

「無事？ 流石にそんなことはないわ……」

「えっと、この辺りにいるあの化け物たちに……」

「そんなとこよ……でもそれだけじゃない……」

初佳はあの初日の晩に算を乱して逃げた折に運が良いのか悪いのか、彼女が軽んじる元交際相手の侑人と行動を共にすることになった。どの辺りともつかぬ森の中を彷徨う中当初彼は初佳を助け、守ろうと云う姿勢を示してはいたのだが、そんな余裕はこの異常な環境の中で長続きするものではなかったらしかった。ぬかるんだ地面を越えて行こうとした時に見栄を張って先に進んだ侑人が腐った手に足首を掴まれて引き摺り込まれそうになったり、どこからともなく現れた獰猛な蜂を追い払うに初佳が矢面に立たねばならなかったりとこの男の頼りなさが露呈して行く中二人は黄昏時に《捕食者》と出くわす。この《捕食者》を相手に侑人は一度喰われかかり、その辺に刺さっていた錆びた鉄斧を初佳が無理矢理足に投げ付けたことで辛うじて逃れたものだったがその後の二人は、初佳本人が多少言い過ぎたかと後悔する程度には不毛な口論になった。彼女の認識ではこの後から侑人は段々と常軌を逸する様になっていったと考えているらしい。と云うのも翌朝二人は空腹を満たす食糧もない中幸運なのか飲みくさして捨て置かれたジュースを見つけたのだがこれを巡って二人は喧嘩になり、半ば無理矢理に侑人が奪い飲み干してしまう。その後から一年生の京典が一旦合流したものの三人は食糧と今後の方針を巡って不和を繰り返し、半ば飢えて余裕の無かった初佳に後輩を慮る余裕すらなかった。見つかった食糧の殆どを侑人が独り占めにする状況にうんざりして離れようとした初佳だったがこの期に及んでこの男は初佳に付いて来て、しかも思い通りにならない苛立ちをぶつけるかのように身体を触ろうとし始める。これを拒絶すると、俺が守ってやってるんだぞと殆ど無理筋の激昂さ示した。もし京典がたとうんざりした様子であってもいかなかったらどうなっていたか知れたものではなかったが、その晩彼女らは《哄笑する女》に遭遇し散り散りになった。初佳は侑人が真っ先に逃げ、次いで恐懼した京典が逃げ出したが自分は逃げる余裕も無く物陰に隠れてそこで意識を失ってしまった。この時自分が最早死に掛かっていることを感じ、せめて誰かが生き残って到達していることに賭けて一番近そうに思われた西門を目指したと云う。

取りも直さず水を所望した初佳にすぐさま奏美が自らの水筒を差し出した。真水を含んでやっと生き返った様に目から消えかけていた精気が立ち戻り、奏美に深々と感謝を告げる。何も礼が出来ないことを詫げる初佳に三人はただ助け合いですと善良な受け答えをして、彼女は少しだけ羨ましそうにこの西側探索班を見やった。

「まともな善意が今でさえ出せるなんてまるで奇跡じゃない。優しさを失わずに來れたなんて、本当に大したもんね。……ところで、あんたたちは何をしようとしていたの？」

「楚さんが少し前に足を怪我して、でもすぐそこに化け物が徘徊していたから置いて行けって言われてこの市街地の廃屋の一つに隠れてもらっていたんです。先程月子たち東の湖を調べていた班と連絡が付いたので、一旦楚さんと合流してから次のことに移ろうかと」

「そ、楚ね……ヤバい状況とは云え、あの子も無事だといんだけど」

「本当に……」

「私も出来ればあんたたちに付いて行きたいところだけど、流石に水を恵んでもらってまた空腹だからと何でも恵んでもらう訳には行かないから」

「そんな、わたしたちもガムぐらいしかありませんけど遠慮しなくても」

「ガムかあ、いいもん持つてるわね。それはあんたらで食ってなさい。私にだって先輩としてのプライドってもんがあるのよ、こんな死にそうな状況でもね」

「……」

「ところで……ここらに來る前、あんたたち、ずっと野宿してたの？ にしちゃ流石に元氣過ぎるぐらいに見えてしまうけど」

「ああ、それですが」

初佳はそんな山小屋を遂に見つける余裕も無く延々彷徨っていた自分がどこか馬鹿らしく思われた。しかし英一の話によれば京典もそこを知っているらしい。当人にその氣があるなら既に到着しているであろう。なら一度自分もそこで休んで英氣を養い、今後のことを考えようと初佳は思った。

「でも大丈夫でしょうか？ 場所もそうですけど、多渋と会ったら……」

「あいつには詫げるわ。切羽詰まってたつつても、身から出た錆だもんね。けじめぐらいはつける。それにこれ以上あんたたちの手を借りてたら私が恥ずかしいし行って帰って來る暇も惜しい時でしょ」

「それはそうですけど」

「ここまでしぶとく生き残ったんだもの、何とかなると思っておくから。あんたたちは自分たちの目的を優先しなさい。霧海たちだけどんどん先へ進ませるのもそれはそれで良くないわ」

三人もこうまで言われれば引き留めることは出来ず、西門の跳ね橋まで赴いてこれを見送った。そうして三人は都市に戻り由海を置いて行った廃屋を調べたのだが既にそこはもぬけの殻だった。書き置きらしいものも見当たらない。

「ここにいないってことは既に出て行ったんですよ」

「そうだと思う」

「このまま楚さんを独りにはしておけないよ。探しましょう！」

それは同感なのだが闇雲に探しても致し方がない。今度は下手にはぐれるまいと三人は固まって廃屋の周囲を調べる。足跡を確かめ、これを慎重に追う。その足跡は途中まで詰所の方へ続いていたのだが、その半ば頃より行き先を変えて南へと動いていた。何があったのかと思いつつ三人はその足跡を辿る。西門側の市街地南の道の続いた先にはやはり廃墟と瓦礫の山で行く手は塞がっており、そしてそこで足跡も消えていた。どう云うことなのかと三人は訝り、周囲を探索する。英一は廃屋の一つに慎重に身を忍ばせ、中をライトで照らした。

「うっ」

それは悪意なのか、廃屋の暗がりの中には血みどろになって引き裂かれた複数の死体があった。長い時間が経って既に肉は朽ち血は錆び果てた為に臭気を残していないが、陰惨なその情景は凡そ他の皆に見せるべきものではあろう筈もない。英一はそれでも内部へ歩みを進め、その死体を調べた。死体が纏っていたのは彼らが知る様な服装ではなくどこか民族調だったり、或いは甲冑の欠片の様なものも垣間見えたためである。未だ彼や周りの二人はこの古城一帯が日本から遠く離れた異郷の地であることを信じ切っていないつもりではあるが、この様なものを見つけるに必ずしも眉唾とは言い難いと考えざるを得なかった。……英一は屍と屍の間に鈍く光るものを見つけた。拾い上げたそれは鍵らしき形をしており、或いはあの西の楼閣の扉を開くのにも使えるのではないかと思わされた。

「ソノ鍵ハ、渡サヌ……」

がしりと英一は足首を掴まれた。見れば周囲の屍がおもむろに動き出して彼を取り囲み始めている。焦燥しながらも英一は鋸を振り下ろしてそれらに対抗した。掴み掛かる手首へ打ち下ろしそれを断ち切る。しかし数が多い。このままでは出口へ向かうことはおろか包囲を脱することさえままならない。

「え、英一くん！」

奏美の声がした。彼の正面を塞ぐ骸骨に、女子の悲鳴ともつかぬ掛け声と共に振り下ろされた角材が叩き込まれこれを叩き潰した。英一は足首にたかろうとする手を振り払い、素早く奏美が作った囲みの穴より飛び出した。奏美と小春が怯えながらも彼を迎え入れた。二人は英一が入り込んだ廃屋の亀裂とは別に開かれたままの入り口を発見しここから援護に回ってくれたのである。三人は廃屋から脱し、それを追って這い出して来る骸骨らを次々と得物で叩き潰した。四、五体と片付けたところで遂に途切れ、英一は再びそつと内側を覗き込んでみるともう何も蠢いてはいなかった。

「助かったよ奏美。危ないところだった」

「英一くんが危なかったから、そのままには出来ないと考えて……」

「いいんだよ」

英一がぼんと彼女の髪を優しく叩くと奏美は頬を赤らめて上目遣いに、嬉しそうに彼を見上げた。それを横目に見た小春は少しだけ不満げではあったが、何も出来なかった自分を思えば口出しはしかねると云うことか黙っていた。

由海の行方はやはり知れなかったが、英一が鍵を手に入れたことで少なくともこれをして西の楼閣が開くか試す理由は出来た。夜が明けて朝が訪れつつあり辺りはうっすらと明るくなっていた。飲み水しか持たない彼らに呑気にしている余裕はない。英一はあてもなく由海を探すより月子たちと歩調を合わせるべく西の楼閣を目指すことを二人に提案し、同意を得た。少し心細いが仕方がない。或いは初佳が向かっている猟師の休憩小屋に他の生存者同様戻って状況の進展を待っている可能性もあるだろう。三人はそう考え、再び城壁を昇った。

少しだけ緊張を帯びながら差した鍵は錠前を外し、その扉は開かれた。……楼閣には幾つか窓があつてそれ故に内側の光源は昼の間である限り心配はなさそうであつた。三人は一階に踏み入り、内部を瞥見する。そこは屯所の様な風情であり、比較的綺麗で荒らされた形跡も見られなかった。小春が一つ扉を開くとその先には休憩室らしき部屋があり、やはり使われていない分埃を被っているものの割合綺麗な寝台が残されているのは三人を喜ばせた。加えてこの一階にはどうやら食糧も保管されていた様なのだが、読めない文字で書かれた札と壺を確かめたところ名状し難い臭気を放つ。鼻を摘まみながら中身を覗くと、どうも野菜らしきものの漬物らしいのだが暗がりの液体に沈むその中身の色は明らかに褐色であり、実に年代物と云う説明も烏滸がましい遺物と云う印象を与えた。

「食べる……？」

「うーん……正直、贅沢は言えないと思うことは確かなんだけど」

幸か不幸か食器類は周囲の棚に仕舞われていた。丁寧に仕舞われていたその金属の箸らしき棒で摘まみ上げたそれは食べて吸収出来る栄養がどれほどのものかと思われたが、由海と別れる前に喫食して既に一晚、このまま水だけ含んでいても濁すお茶も残らず疲労で動けなくなることは分かり切っていた。それでまず英一が更に一つまみ盛り付けられたそれを慎重に齧り、ゆっくりと咀嚼して吞み込む。その味わいは非常に塩辛かった。野菜の味は殆どよく分からずくたびれた繊維を咀嚼するたび舌に沁み込むのは塩味と、気の抜けた醤油と酢を混ぜたような微妙な味わいが感じられた。

「味だけなら……食えなくもないかな……」

食べている間小春が開けていない隣の壺も開いてみたので奏美が共々これを覗き込むと、先程より更に強烈な臭気を発する中身が待っていた。瞥見した感じそれはチーズないしバターのように思われたが、熟成と云う言葉を通り越した異臭が感じられてとてもこれは食えるようには思われなかった。と云え英一は漬物の方を食べてこの上恐れても仕方がない様に思われ、二人が遠慮したその中身も幾許か頂いてみることにした。……鼻に付く臭気の割にその味わいは大人しめで、やはり塩気の多さから思ったよりは食べれると云う感想だった。外側はどうにも黒ずんでいる感じだが内側はまだ幾らか褐色で、所見通りこれはチーズの成れの果てなのだろうと思われた。また更に他の壺を調べると水もあったがこちらは明らかに腐っており飲むことは躊躇われた。食べ物については暫く消化して中らなければ、恐らく二人も食べられるだろう。その間に下手に動くとう方が怖いと云うことで三人はここで一旦休息を取った。休憩室で奏美と小春がひと眠りする間、手前の屯所の椅子に座って彼は何かやって来たりしないかぼんやりと監視している。だが逆に信じ難い程度にはただ沈黙だけが占め、二人と交代で休憩室に入ってまた英一は軽く眠った。そうして彼が出て来た時点でどうにもお腹を壊さなかったことから、二人も空腹に負けてこの幾ら寝かせられたのかすら知れぬ保存食に手を付けるに至る。二人も鼻に付く臭気、それに塩辛過ぎる点を除けば味に格別の問題を感じることはなく、やや希望的な見方と云えばそうだが安全だと思われるこれらを確保して三人は少しだけ前途に安堵を抱いた。程良く腹を満たした後それらを元に戻し、彼らは二階への階段を昇った。

二階は多くのロッカーらしき収納庫が立ち並んでおり、その一つを開いたところ白骨死体が転がり出て三人は仰天した。凡そこんなところから現れる死体に対し碌な経験を持たない三人は一旦それから距離を取って様子を見たが、差し当たり何も起こらないままなのを見てこれを忌避しながら別のものを開く。中には朽ちた弓矢と鎧があった。鎧は試しに英一が着てみようとしたが、大変な重量でこんなものを着ては動けるようにも思われず断念された。

「今更だけど、何だかファンタジーみたいだね。それか西洋の歴史物語に出て来そうな」

「いや、うん……確かにここまで起こっていることを思うとファンタジーじみているとは思うけど」

「そんなことが起こり得るものなのでしょうか？」

「さあ……？」

この階に目ぼしいものが見当たらないのを理由に三人は三階へ進む階段を探したが、見つかった扉は開かない。内側から施錠されているのかとも思われたが、ドアノブは動くのにその扉が不自然に引っ張られてこちら側に決して動かない様になっているのではないかと云う風に思われた。三人はそれでどうしてやったものかと途方に暮れ、ともかくもこの階を調べようと思ふことになり三人で手分けして何か変なものはないかを探し始める。数多くあるロッカーは何分死体が転がり出て来るのではと思うと躊躇われたが、開ける際には三人がお互いを見ている形で開けるとした。それで試しに一つ英一が開いてみると、やはりと云うか、中から子供かと思しき死体が転がり出て床に崩れ落ちた。

「……え？」

「うそ」

「なん……ですか、これ……？」

転がり出た死体が巻き戻される様にしてロッカーに戻り、ひとりでロッカーの扉が閉じられた。恐る恐るもう一度開くと、全く同じことが起こった。三人はその異様な状況に困惑を隠しようもなかったが、ふと小春が既に開いたロッカーを指し示して言った。

「あれ、あそこのロッカーから出て来た死体もなくなつて……閉じられてる!？」

見れば確かに最初開いたロッカーとその死体も元通りにされてしまつていた。どう云う訳なのかと思われた時ふと、英一の目に二階入り口傍に張られた張り紙が目付いた。全く未知の文字らしきもので綴られたそれを最初彼は読めないと云う以上の理解を示しようもなかったのだが、そこで脳裏に声が響く。

——其ハ確カニ、読メズシテ先ヲ開クコト叶イ難シカ。然レバ、示シテヤルモ一興ナリヤ、ノウ？

その声はあの夢に出て来た不気味な仮面の骸骨だった。彼は目を見開いて身震いした。たまたま視界の端に留めていた小春が、次いで奏美が英一を見た。彼の恐懼の表情に二人は辺りを見回したが三人の他には誰もいない。……彼の瞳に俄かに映つた化生ならぬ化骸の姿を二人は認知しなかった。

「どうした、英一くん？」

「……」

「英一くん！」

「っ！ あ、ああ、すまない、ちよつと、妙な声が聞こえた気がして……」

「妙な声？」

二人にあの夢とこの時間こえたことを語るべきか彼は幾許か迷つたが、幾ら現実味の乏しい現状でも更に混乱を投げ込む様なことを二人に語りたいとは思われなかった。要らぬ不安を煽るより自分の内に留めておくべきだろう。同じものを見たらしい游次郎やそのことを伝えられていると思われる月子を除いては。彼はぱんと頬を両手で叩いて気合いを入れ直し、張り紙に近付いた。二人もそれに付いて来る。

「これ……読めないよね」

「知らない文字ですね。筆記体には見えますけど、それにしつてアルファベットならこうは書かないですよね？」

「うん……」

二人が言う間に英一はそれをまじまじと見た。彼も読める訳ではない。しかしあの仮面の骸骨が囁いたのだ。『忠烈なる一家。その長男と次男が四五六年に相次いで誉高き討ち死にを遂げ、四五年に父もまた敵に降るを潔しとせず自刃を遂げた。母は翌年の落城と共に末子を刺し殺し、自らも井戸へ身を投げた』と。これを聞いて、その張り紙をまじまじと見て彼はあの化け物はゲームでもしているつもりなのだろうかと思われた。それは実に陳腐な謎掛けなのではないかと。

「なあ、二人とも。さつきロッカーにあった死体、もう少し探してみないか？」

「えっ？」

「その、思わせぶりに張つてある張り紙は何かのヒントを書いてあるんだろうけど、この階にあるもので上手く符号、操作させれば何か起こったりするかもしれないだろ」

「そう云うものでしょうか……ゲームだったらそうでしょうけど」

「そうだよな。……でも、他に手がかりもないし。怖いけど、調べてみてもいいと思う」

奏美がこの様に賛意を示すことで小春も已む無しと手伝うことに決めた。それで三人はロッカーを調べて回り、死体が収まっているのは五つであることを確かめた。改めてそれらを調べると確かに、

如何にも騎士然とした甲冑に身を包んだ大柄なもの・小柄でなで肩に見えるもの・少し背の高いもの・英一と同じ程度の背丈でやはり甲冑を纏っているもの・まだ子供らしきものの五つがあったのだ。英一は出鱈目にも思われるがその示された順番に従いロッカーを開けた。一度間違ふことで開いたロッカーが全て死体を収め直して閉じられることを確認すると二人もこの謎の順番で開いて行くのだと云う点に従う様になった。

最後に母親らしきものの死体が収まったロッカーが開かれ、その中身がどしゃりと床に崩れ落ちる。何とも悪趣味で故人を穢す様な行いをしていることだと三人は思わずにはおかれぬところではあったが、それらが全て転がり出たところ辺りに妙な耳鳴りが響き、死体がおもむろに、ひとりでに立ち上がり三人など目もくれず三階への扉を目指した。死体の群れはその扉を殆ど力任せに叩き、何とも知れぬ叫びを上げた。奏美と小春は二人をかばう英一の後ろでその服の袖を握って、込み上げる恐怖に目を見開きながら耐え忍んでいた。英一はこの異様な光景を前にして動じていないかに見えた。実際には彼の瞳には、またしてもあの仮面の骸骨が影を差していたのだった。仮面の骸骨はケタケタと笑いながら彼を顧みて言った。

——天晴レナリト称エラレシモノドモハ何ヲ怒リ狂ワンカ？ ソレハ、彼ノ者ラコソ騙サレ、裏切ラレタ為ニ死セル故ニゾ。ソノ奸計ノ主コソ、コノ楼閣ノ先ニテ眠ラン。サア、確カメヨ、ソシテ汝ラニ能ウモノナルカ、見セテミルガヨイ。

言葉の終わりと共にその影はふっと消え、辺りの耳鳴りと異様な叫びは終わっていたことに英一は気付いた。三階への扉はいつの間にか開かれていた。英一を二人が見上げた。彼は何か恐怖したと云うでもないがただ無事であることを伝える為に軽く笑みを浮かべた。

三階への階段の扉を潜ろうとした時、微かな物音を聞いた英一は振り返った。二階は静まり返っているか見え、小春と奏美が怪訝そうな表情をする。ただの気のせいだったと誤魔化そうとした時彼は視界の端に、少女の服の裾を見た。翼であるかに見える少女の。

「ごめん二人とも、忘れ物を思い出したから少し待っててくれないか？」

「えっ？ うん、いいけど……」

小春は訝し気な表情を崩さなかったが、それでも了承した。英一は急ぎ少女の影を追って一階へ降りた。少女はそのまま西の楼閣の外に出たのに従い彼も外に出る。暗さから言ってそろそろ夕刻が近いだろう。長引かせたくないものだがと思いつつ彼は更に少女を探す。楼閣から更に北側へと進み、半ばまで崩れた歩廊で立ち止まって彼女は振り返った。

「翼」

英一の呼びかけに少女は少しだけ嬉しそうに、しかし寂しそうな顔をする。決して応答しないこの存在に彼はどう云う理解を示すべきなのか迷っていた。

「どうしてここへ連れて来たんだ？」

彼は端的にそう問い掛けた。少女は手をかざす。すると不意に英一は宙に浮いた感覚がして足元を見る。事実何故か浮き上がっていて彼は思わず変な声を出したが、それだけにはとどまらず英一は宙を飛んで城壁の向こう側へ降り立たされた。少女は崩れた城壁の宙を浮いている。一体どう云うつもりなのかと彼は少女を見たところ、毎度の如くと云うか、自分の背中側を指し示すので彼はこれを顧みた。そこには何者かの屍が転がっていたが、その手には一冊の本があった。

「これのことか？」

英一は恐る恐る本を拝借して少女に問う。少女はにっこりと微笑んだ。それに安堵すると共に英一は、その笑顔は記憶の中にある翼のそれと瓜二つであることを感じずにはおかれず口に出した。

「なあ、お前は翼だろう？ 葦杜英一の妹の、葦杜翼！ 何でこんなところにいるんだ、一体お前は どうなっているんだ？」

少女は応える様に口を開いたが……何もその口から声が迸ることはなかった。それでまたこの少女は寂しそうに笑って誤魔化す態度を取った。——ごめんね、おにちゃん。何故だか彼にはそう言いたそうに思われた。少女が再び手をかざすと彼はまたしても宙を飛び、元いた側へ飛ばされる。降り立って彼が顧みると、笑みを浮かべたその少女がふっと消えるのを見た。それは明らかに人間ではあるまいと常識的な発想として英一は考える。ここは大概異常地帯だが、この翼そっくりの存在はそうした異様な、人外存在であると云うことか。仮にも俺の妹の姿を取って、善意と思いき行いを繰り返すそれは一体何なんだろうかと彼は苦々しく考える。伝えたいことを言葉にして伝えられぬ理由は何なものか、全く。些か彼は不満げに溜息を吐いた。

「先輩！」

不意に小春の声がしてそちらを向いた英一は、息を切らして彼女が駆け付けて来たのを見た。しかし奏美がいない。それだけで何かあったと理解するには十分と言えた。

「小春ちゃん、奏美はどうしたんだ」

「と、突然あの《黒い人型》が三階からやって来て、一緒に逃げたつもりだったんですけど瀬之川先輩とはぐれちゃって……！」

「なんてこった……！」

こんなことになるなら手間でも二人共付いて来て貰った方が良かったかもしれない！ 英一は自らの行動を後悔せざるを得なかったが、ともかくも奏美を二人して探しに出た。楼閣の一階は無人で、二階は逃げて来た大元であることからまずいないだろう。なら逃げ道はこの城壁上か下の廃市街だけだ。二人は一旦城壁を下って廃市街に出た。——そこにはあの物々しい雰囲気 が漂っていたものだ。今まで散々追い回してくれた《黒い人型》と出くわした時に感じる忌まわしい雰囲気 が。この中を助けに行かねばならないと云うのも恐ろしいが、躊躇っている場合ではない。二人は街へ分け入った。十字路に差し掛かったところで英一は俄かに足音を聞き、小春を制して角の死角を覗いた。覗いた先に丁度《黒い人型》が歩いており、彼が慌てて顔を引つ込めた直後にそれは彼の側を向いた。英一は速やかに小春を促して二人して逃げ、適当な廃屋に身を潜めた。追って来るその影は近くを徘徊し、しかし幸いなことに二人に気付くこともなかったのか通り過ぎて行った。恐ろしい気配が一旦は過ぎたことで二人は安堵し、英一が手を引いて小春が立ち上がる。彼女は一つ軽く咳をした。

「大丈夫かな。毎回無理をさせちゃって」

「平気、です。辛いですけど、こんなことで足を取られたらそれこそ、死んでしまいますから」

「小春ちゃん……」

「先輩、私、頑張りますから。瀬之川先輩や楚先輩、それに他のみんなと一緒に、きっと、生きて帰りましょう」

その笑顔は確かに作られたものだが、何より糊塗の為ではなく自らの望みの為に作られたものだった。自らに自信のないところを度々見せて来た彼女はここに至り、己を鼓舞するに足る理由を見出していた。その内心を英一は汲みかねたが少なくとも最初の頃に比しては実に前向きになったことを彼は喜ばしく思った。

「そうだな。きっと、みんな大丈夫だからさ。どうなったのか分からない委員長みたいなものいるけど、死んだと決まった訳じゃないんだ。きっと、きっとだ」

「はい。……誰だってこんなところで死にたい筈がないんですから、誰より私たちが率先して行動して、霧海先輩が言っていたあの、時空なんとかかんとかって言う機械を動かしてやりましょう」

「ん、そうだな」

英一のその返事は変哲のない穏和な笑顔を伴っていた。それを覗き込む小春の微笑みに微かな紅潮が混じっていたのを彼は辺りの薄暗さ故にか気付かなかった。

《黒い人型》の気配がすっかりしなくなった後に二人は辺りを警戒しながら出て、周囲を改めて探ってみたがこれと云って何かが見つかったものでもなかった。西門の外を探すべきか、とその門前で二人が頭を悩ませていると東より聞き覚えのある声が飛んだ。

「英一くん！」

奏美の姿が見えて一安心した二人は、その奏美が由海を連れていることに気付くと更に喜んだ。当人、特に由海は短い様で長い別離から漸く合流出来たことにいたく安心したらしく涙すらこぼしていた。曰く、由海はあの後廃屋でどうにかやり過ごしていると不意に辺りが真っ暗になり、自分が宙に投げ出されたと云う。落ちた先も真っ暗だったが足首程まで水に浸かっていることに気付く。しょうがなしに壁を伝って歩くと突き当りの頭上に光が見え、自分が何故か井戸の底に落ちていると気付かされた。井戸には縄梯子が掛けられており由海はそれを伝って外に出、森の内にある見覚えのない廃屋の隣に出た。廃屋で農具と思しき刈り取り鎌を拝借し、東側に見える城壁からおおまかな位置を予想して森を歩くこと暫くで漸く西門に舞い戻り街に戻ったところで逃げる奏美と合流し一緒に逃げていたと云うことだった。

再会した四人はともかくも西の楼閣に登って、一度一階で休憩した。周囲は既に暗く、また追い回される等していたこともあって英一が慮ったのである。それで四人は、取っておいたガムを食べた。

「おいしい」

奏美が言ったのは自然なところだろう。ソーダ味のガム。これは游次郎が元々持っていたものだった。ここまでで度々食べて来た怪しげなものと違うその安上がりだが親しみやすい味わりに四人は自分たちの幸運と幸福を噛み締めた。

休憩と云って、月子たちがどう云うペースで進んでいるか分からぬ以上夜だから寝ていてよいとは思われず英一たちは深夜ながらも歩みを進めた。即ち三階へ。三階への階段は開放されたままだった。四人は内心恐る恐る、英一を先頭にコツコツと石段を踏み鳴らしながら登った。そうして三階に達した時、彼らがライトで照らした先に見たのは闇だった。……どう云う訳か三階の入り口から先は黒い靄だらけで内部が見通せない。一体何があるのかと四人は怪しく思ったが、この期に及んで引き返しても得るものは何もないが故に踏み込んだ。そこはやけに広い空間だった。靄で床が敷き詰められ壁もまた靄に包まれた異様な空間。その先には人影が見えた。馬に跨る人影。

「みんな、避ける！！」

英一が叫んで咄嗟に飛び出すと、その跡に騎馬が突っ込んで来た。死肉の様な色をした馬に跨る全身鎧の得体の知れない騎士。その手には槍と盾が握られている。こんなものかよ、と英一は内心でこぼした。その露骨な殺意とふざけた化け物ぶりにいよいよファンタジーも行き過ぎていると思われるが、差し当たりその攻撃をともに喰らった日には命など幾つあっても足りるまい。英一は鋸を構えてその矢面に立った。他の面々も得物を持たない小春を除いた二人が彼の両脇を挟むように立ち小春がその後ろに隠れる。当の小春はこのただ守られるだけの図に少し不服そうな表情を見せたが、それを見た英一が鞆を開いて本を渡した。

「これは？」

「外に出た時に拾った。もしかしたら役に立つかもしれない、持ってた」

そして駆け引きが始まった。騎士は突撃後旋回して四人の様子を窺っていたが、英一が進んでこれに立ちはだかると彼に槍を突き付け、馬に鞭を入れ駆け出す。あんな騎馬突撃まともに喰らってなどいられるか、と英一は周囲に散開する様叫んで自らは更に前に進み出た。自分が諸共避けては恐らく向こうもそれに合わせて突進を修正して来るだろう。彼はなるべく引き付けてこれを避けたかったの



である。騎士がその大きな槍を掲げ、突き刺す様に振りかぶる。英一は今だと横へ跳んだ。その槍が彼のいた場所を貫くのを風で感じ、英一は内心底冷える様な思いであった。突撃が空振ったのを見た由海がその側面を襲う様に駆け出す。しかし相手も速やかに駆けて彼女の攻撃を躲した。そこで騎士がぎろりと奏美を見た。奏美は散開してからどう動くべきかと判断に迷って棒立ちになっていたのだ。運動部でもない彼女にそう機敏な行動が求め得る筈がない。英一は直ちにまた走り出し、騎士の盾側よりその騎馬の足を引っ掛けんとする様に近付く。騎士もこれに即応することは叶わず、左に逸れて英一の行動を回避した。そこでまた更に後ろから由海が近付く。しかし騎馬を駆るその足は速く、一気に英一たちは距離を開けられてしまう。これじゃあこっちの体力が持たないと英一のみならず四人は思わざるを得なかった。……小春は彼我の挙動を観察しつつ預かった本を開いた。そこには読めない文字がつつらと綴られる中に魔法陣らしき紋様が幾つか見られた。まさか本物の魔道書かと一瞬思ったものの、流石にそんな馬鹿なと常識的な発想をして考え直す。だが英一がわざわざこれを拾って来た以上ただの鈍器として使うことを求められているとは考え難く、その馬鹿馬鹿しい用途こそ正しいのではないかと思われた。でも、どう使えば？　そこそが小春にとって最大の難問であった。一体彼女にそうした非現実を実現する何の知識があるう？

騎士がまた突撃を開始した。次は英一に流されず奏美へ矛先を向ける。英一が割って入ろうとするが、騎士はその盾をして彼を力強く払い除けんとした。大きく振られる盾と鋸がかち合い、金属の高い音が響いた。英一は思いもよらぬその怪力を相手に弾き返されてしまい、焦りと共に奏美を見た。由海の横槍も間に合いそうにない。奏美は自らに迫る敵を前にして慌ててその角材を両手で横に持った。騎士の槍はその正面より突き出され、角材を真つ二つに突き破った。しかしそれで狙いがずれたらしく奏美の身体には当たらずただ髪の毛を掠め、彼女は斜めに吹き飛ばされた。

「きゃあああああっ！！」

悲鳴と共に地面を転がった奏美は強かに身体を打ち付けたらしくすぐには起き上がれそうになかった。騎士はそれを見てか次の標的を由海とし、旋回して更に突撃を開始する。自分が明確に狙われていることに気付いた由海はぎょつとして恐慌を覚え、背中を見せて逃げ始めた。どう考えても逃られる筈がない。英一が必死で妨害に入り、その一撃を逸らしてやれたものの由海は騎馬に蹴飛ばされ大きく吹っ飛んだ。ごろりと転がされた由海は意識が飛んでいるのか起き上がる様子もない。劣勢を如実に実感する英一だが二人を置いて逃げる訳にも行かず、何とか小春を守らんと騎士に食い下がる。接近戦になったの英一は得物が自分の竹刀ではないとは云え騎士との打ち合いでこれに劣らぬ技量を示した。一撃、一撃と叩き付け、また振るわれるその槍を鋸で的確に捌いて退ける。彼自身そこまで自分がやれるとは信じていかなかったが、この手応えだけは英一に自信を与えた。だがそう云う勝負にあつては不利と読んだか騎士はまたしても盾で弾くことを試み、何とか防いだものの英一は後退を余儀なくされて距離を作られる。こうなつては向こうに主導権があるのは明白だった。そして丁度、英一の背後に小春はいた。彼が一瞬それに気付いて振り返ると同時に騎士が突撃を開始した。小春に運動神経は期待すべき由もない。英一は半ば賭けのつもりで鋸を騎士目掛けて投げ付けたが、予期していたかのようにそれは盾で弾かれてしまった。轢かれるすんで騎馬を避けはしたが最早万事休すかと思われた時、小春が本に目を落としていた視線をおもむろに前へと上げた。

轟音と共に騎士に雷光が取り付いてこれを撃った。騎馬が不快に嘶き、騎士もまた初めて苦悶を思わせる不気味な呻きを響かせる。英一は小春を顧みた。小春は開かれたページの紋様を指でなぞっていた。読めもしないが故にどうなるものかと思われたが強かに反撃に成功して彼女は微かに笑みを浮かべた。だが騎士としてこの一撃で斃れる程やわではないらしかった。態勢を整えると、今度はその兜の奥の鈍い眼光がどこか憎々しげに小春を捉える。慌てて小春はもう一度紋様をなぞったが光ったままの模様はもう何も起こらない。英一はまづいと思いつつ弾かれた鋸を取りに駆け出し、次いで騎士を阻止せんとしたが間一髪で騎士の方が早く駆け出した。――騎士の突進に対応出来る程に小春は元

より俊敏などではなかった。或いは小春自身がそれを誰より理解していたのだろう。彼女は避けず、ページを捲って次の魔法陣をなぞった。そうして浮かんだのは光線だった。宙に大きな魔紋が描かれ、そこより太い光線が飛び出す。その光線が騎士の胴を灼くのと槍が小春の腹を貫くのは殆ど同時であつた。爆音を思わせる大きな音と、肉を裂く嫌な音が辺りに響いた。

「小春っ!!」

英一は最早敵にも構わず小春に駆け寄った。騎士はその甲冑ごと灼かれて落馬し床に斃れた。騎馬もまた最後の嘶きと共に崩れ落ちて果てた。そして小春は、槍に串刺しにされたままに地に横たわっていた。彼が駆け付けた時まだ彼女は血まみれになりながらも死んではいなかったが、助からぬことは誰の目にも明らかであつた。

「せん、ばい……」

「喋るな、直ぐに手当てをしないと」

「無駄、ですよ……そんなこと……」

「喋るなって言ってるだろ!」

「せんば、い……」

言つても小春は聞かずに、弱々しい仕草で彼を抱き寄せようとした。英一はそれに気付くと少しだけ困惑したが、殆ど考えなしにそれに従つた。二人の顔はほんの近いところまで迫つた。そこで小春が満ち足りた様に微笑みを浮かべた。

「お願い、しても……いいです、か……?」

「何だ」

「キ、ス……」

最後の一言を終えることなく辛うじて開いていた瞼が落ちて、小春はもう動かなくなった。動かなくなつたと云う事実を彼は見、考える。それは死ぬと云うことだ。死ぬとは? 奇妙な堂々巡りの問答が短い間彼の内側で繰り返された。辺りに小春の血がどろどろと広がつてその亡骸や屈み込んでいる英一の服を汚してゆく。止まらないままの血を見て彼は懷から使い古したハンカチを取り出して出血を止めようとした。当然こんなもので止まる訳もなくただの徒労だった。徒労でも何とかしてやりたかつた。彼はただ無力だと云う事実を受け入れることに苦慮し葛藤していたのだった。……声がした。それは奏美のものだった。小春ちゃん、と悲痛な叫びと共に駆けて来た奏美はしかし生気を失つた彼女の骸と胡乱な顔をして次にどうすればいいのか分からずにいる英一を次々と見やつた。奏美は小春の頬を、次いで額に触れ、その冷たさを確かめて静かに涙を流した。ぐすりと声を殺して奏美は泣いた。そしてその崩れた顔のままに英一を見る。いつまでも思考停止に嵌り込んでいるこの少年を。

「英一、くん。英一くん」

「……え、あ、ああ、奏美か。早く小春を助けないと。こんな出血じゃ大事に至る、早く何とかしないと」

「英一くん……駄目だよ……小春ちゃんはもう……」

「何がもうだよ。早くしないと、早くしないと」

「小春ちゃんは、もう死んじゃつたんだよ!!」

間近で叫ばれたことは英一にとって頬に平手打ちを喰らつた様な印象を覚えさせた。奏美を一度見改めて小春の亡骸を彼は見た。まだ彼女の最期の微笑みは形を残していて、しかしその瞼だけは眠たげに半ば過ぎまでしか閉じられていなかった。それを見て、更に彼女の腹腔を抉る槍が突き刺されたままの様を見て彼ははっとした。その途端に英一は、感情がとめどなく溢れて止まらなくなった。わあ、と彼は泣いた。男として惨めではないかと思われる程に。悲痛な声をして由海が近付いて来たが英一はそれすら耳に入らず、ただ人目を憚らずに慟哭した。その傍で斃れていた騎士と騎馬の体が

闇に溶ける様に崩れ、三階の空間が本来あるべきだったのであらう石造りの一室に立ち戻った。それすら何程の意味も今の彼らにはありはしないのだったが。

最終更新二〇二六年八月十六日